



vol.41

文責：荒木 秀夫
(徳島大学大学院教授)

定位能力と分化能力を超える 「定位分化能力」

ここまで、第二の段階でのコーディネーション能力における定位能力と分化能力のことについて触れてきました。これらは個々に発揮されるコーディネーション能力ですが、同じように第二の段階では、他にも10〜15ほどの能力が含まれています。しかし、この段階における能力は実際の運動場面において、コーディネーション専門家ではない選手や指導者でもイメージしやすくなるという点では2ないし4つの能力に着目することで充分といえるでしょう。

その一つに「定位分化能力」があげられます。定位分化能力は、「定位能力」と「分化能力」を合わせた能力ということではなく、2つの能力の上位に位置する別の能力であると考えて下さい。定位能力と分化能力にはそれぞれ発揮する脳神経系の回路が存在しますが、定位分化能力は、さらに広範な神経回路が関与することになります。生理学的な詳細

な話しには触れませんが、「定位分化能力」とはどんな能力なのかという点について少し整理してみます。

以前に、連載の中で感覚運動統合のことについて述べたことがあります。それは定位反射や定位能力との関係からでしたが、そのことを延長した話しとなります。何かを情報処理して把握するといったことが定位能力ですが、これは2つのレベルから考えることができます。一つは、まさに感覚情報処理のレベルです。どういう形、どういう色、どんな状況……といったことで、仮に、それを理解しようとする対象が、よくわからない、どんなものか判断できないということになると、理解するためにある種の「動き」が生じます。しかし、その「動き」は、ほんの小さな動きで、通常では見た目ではわからず、筋電図などの指標をとれば何とか見える程度です。

もし、この時に「何のために」という目的、つまり何をするためにその対象を理解しようとしているのかはつきりしていると、その「動き」が異なってきます。事前の「かすかな動き」が微妙に違ってくるわけです。まずは、このレベルから少しずつ探っていくことにしましょう。

問合せ先／スポーツ推進課 プロ
ジェクトK・スポーツ推進係
☎ 57・4850



乳児シリーズ vol.12 最終回

赤ちゃんがつくる“世界”

生まれたばかりの赤ちゃんは、言葉が話せませんし活発に動くこともできません。しかし、大切なことは、身体への刺激がどうだったかを感じ取ることです。前号の最後に「近位環境」のことに触れましたが、それは自分の手足を伸ばして届く範囲までの環境だと理解して下さい。これまで触れてきた顔、物体（例えばスプーンのこと……）などの話しは近位環境の範囲のことが中心でした。手の届く範囲にあるものは、届かない範囲にあるものとは認知の仕方も異なります。手で触れる物体への理解は、次第に離れたところの物体への理解につながっていきます。こうして赤ちゃんは、環境が持つ自分に対しての意味を理解し、楽しいとか危ないとか、いろいろな感情と結びつけながら思考の能力を発達させていきます。

例としてあげてきたように、他人との関係、自分を理解し（自我の形成）、物と物、人と物との関係を理解することによって、脳の中で「想像」の世界を作るようになり、同時にこの世界が跳ね返って自分自身へも影響を与えることになります。想像への拡がりが多いほどアイデアが浮かぶ、選択肢が浮かぶといったことになるわけです。そして、さらに抽象的なイメージへの道が開かれ、これが将来の思考、思考方法を築く能力に関係していきます。2つのコップと、2匹の犬から“2”という観念を理解する、そ

して悪いこと良いことの“軸”を理解するといったように、抽象的な環境が作られます。こうした拡がりを出す近位環境から始まる様々な「環境」は、決して段階的に発達するわけではなく、行き来しながら発達していき、その基盤は「近位環境」にあります。大人になっても、何かを考えて決断しようとするときに、自分の身体が静かに動くことがわかるでしょう。大人になっても、近位環境への働きかけは意味を持ちますが、赤ちゃんにとっての重要性は大人の比ではありません。

赤ちゃんシリーズは今回で最後となりますが、結論として赤ちゃんの育ちは、ささやかなことが大切だということになるでしょう。このことを理解するには、高度な知識ではなく、本来の大人が持つ感性による“子どもを慈しみ、愛しむ心”を持つことが大切かと思います。これは、本来の人間の“本能”です。シリーズの中で大人が赤ちゃんに接する時のふるまいを中心に例としてあげてきましたが、これらのことは指摘するまでもなく、大人達が誰もが行ってきた、誰もができる行為です。これが、私たち人間の本来の姿だということをもとめにして稿を終えたいと思います。

